28P-am10

慶應義塾大学病院における実務実習での代表的 8 疾患に関する取り組み（第 2 報）

〇津田 壮一郎[1], 池淵 由香[1], 清宮 啓介[1], 青森 達[1,2], 別府 紀子[1], 山口 雅也[1],
望月 眞弓[1,2]（[1]慶應大病院薬, [2]慶應大薬）

【背景・目的】我々は第 137 年会にて、改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムで提示された代表的な 8 疾患（以下、8 疾患）に実務実習生（以下、実習生）が広く継続的に関わるための取り組みを報告した。この取り組みで用いた当院独自の「8 疾患への関わりと継続性の調査票（以下、調査票）」は、8 疾患への関わりの到達度の評価を目的としているが、薬局と病院の実習の連続性確保にも有用と考える。今回、薬局と病院の両方で調査票を使用し有用性を評価したので報告する。
【方法】平成 29 年度第Ⅱ期に当院で実習予定の実習生 25 名を対象とした。初めに第Ⅰ期の薬局実習中に関わった疾患を実習生自身に調査票に記入させた。第Ⅰ期終了後、大学が実習生から調査票を回収し当院指導薬剤師へ渡した。第Ⅱ期の病院実習では、当院指導薬剤師が第Ⅰ期の調査票を参考に未経験の疾患を優先して関わる患者の割振りを行い、毎日の振返りの際に 8 疾患への関わりについて実習生と共有しながら共通の調査票に記録した。調査票から 8 疾患の実施率と継続性を、薬局と病院実習それぞれで算出するとともに累計を算出した。
【結果・考察】8 疾患全てに関われた実習生の割合は、薬局実習 36%（9/25 人）、病院実習 24%（6/25 人）、それらの累計 68%（17/25 人）であった。また、実習生が継続的に関わる事が出来た疾患数は平均で薬局実習 2.28 疾患、病院実習 3.8 疾患、それらの累計 4.48 疾患であった。薬局と病院を総合することで実施率と継続性は高まり、当院の調査票を薬局から病院実習まで共通して使用することが、実習生の 8 疾患の網羅性・継続性の管理に有用であることが明らかとなった。今回のツールは、病院実習時に薬局実習内容の把握を行ない、一貫性を確保した 8 疾患の効果的・効率的な実習の実施が可能になると考える。